

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 2 LESSON 2 授業例②

S.A. 先生

指導計画表

(全8時間)

時間	学習内容・主な活動
1	■とびら ・テーマの導入 ■GET Part 1 ・新出単語の導入 ・文法の導入
2	■GET Part 1 ・本文の導入・理解 ・文法の運用 (Practice)
3	■GET Part 2 ・新出単語の導入 ・文法の導入
4	■GET Part 2 ・本文の導入・理解 ・文法の運用 (Practice)
5	■USE Read ・新出単語の導入 ・長文読解
6	■USE Read ・内容の確認 ・音読
7	■USE Mini-project ・自分史エッセイ
8	■We're Talking②

実践例

1. 量に対する抵抗を軽減し、 達成感を高める

2年生 LESSON 2 A Calendar of the Earth では、地球の歴史という普段中学2年生が意識しない壮大なテーマが扱われている。また、接続詞 when が新出の文構造として扱われ、単文が多かった以前の LESSON と違い、1つの英文に含まれる語数が増え始める Lesson でもある。一部の学習者にとってはトピックの難しさとともに、量に対するハードルも上がるため、英語を勉強する意欲を急激に低下させることになりかねない。そこで、LESSON 全体を通して、常に自分とトピックとの関連を意識させながら、達成感を味わえる活動を展開しようと心がけた。

2. 実際の指導

とびらを使って過去を表す表現を意識させた後、順に新出単語、文法を導入していく。教科書 p.20 にある文法の要点を使った説明の後、p.12 の Drill を丁寧に行い、文法の定着を図る。必要に応じてワークブック等で練習問題を取り入れることも可能である。続く本文の導入・理解では、健たちのクリーンアップデーを理解するとともに、生徒たちがクリーンアップデーと同様の活動でどのような経験をしているのかを意識させたい。例えば、資料1のようなワークシートを使うことができる。多くの生徒が自治体の清掃活動等に参加しており、捨てたものも感想もそれぞれに、個性豊かな意見が出てくる。また Practice でも会話練習を通じて、過去形を自分の今までの体験や感想に使うことができると感じる展開を広げることができる。(資料2)

GET Part 2

GET Part 1 と同様、十分な Drill を行い、文法の運用に向けて準備を進める。特に接続詞 when の使い方については、POINT の文型を念入りに練習する。本文の内容理解に付け加え、GET Part 1 でもあったように、生徒自身の体験から、クリーンアップデーのような清掃活動で見つけたものについて意見を交換する。化石を見つけるというような発見はほとんどないものの、見つけたものについてなぜそ

のようなものが見つかったのか、理由を考えるとおもしろい意見ができる可能性もある。また、中学生が化石を発見したというニュースを取り上げたり、地域の交互学的な特徴を織り交ぜたりすると、本文の内容以外の学習にも目を向けることができる。

Practice の speak, write にチャレンジの部分を加え、自己表現につなげると同時に、身近な話題を文法練習で学習した形で表現できる手応えをつかむようにする。(資料3)

USE Read 読解

いよいよ Read で長文読解に取り組む。(資料4) 背景知識として、地球の歴史がカレンダーとして表現されていることを教科書の絵を使って説明しておく。また、ここでは2年生になって初めて100語をこえる長文を読むので、長文読解のポイントを学習してから取り組む。そうすることによって、長文に対する心理的なハードルを下げるるとともに、問題に取り組んだときの達成感を少しでも得るようにすることができる。

まず、内容を理解しながら時間配分に対する感覚をつかむために、目標時間を設定する。中学3年終了時には、高校入学試験等を踏まえて、相当量の長文を読み、問題を解く力をつけなければならない。最終目標を1語1秒、つまり1分間に60語と考え、2年生の Lesson 2 の段階では1分間に40語を目標とし、この長文を3分30秒で読むことと設定する。

次に、長文読解で必要とされる3つの skill, Scanning, Skimming, Reasoning を意識させて、内容理解へ進む。たくさんの情報の中から必要な情報を拾い集めることが Scanning であることを伝え、ここで1度長文を読む。Scanning を実感すること、また設定時間内に課題を達成することを鑑み、本文に目を通す3分30秒の倍、7分で資料4にある設問1、設問2までに取り組む。キッチンタイマー等で時間を計り、3分30秒が経過すれば合図を送ると、現状での生徒の読むスピードと目標との差がどのくらいあるのかを示すことができる。次に文章全体を流し読む Skimming である。

2 度目の読みの前に、設問 3 に目を通し、読み取らなければならない内容を絞るようにする。また、それぞれの質問にはヒントとなる段落番号があるので、どこに質問の答えがあるのかをある程度推測できるようにしておく。ここまでの活動で大まかな長文の文章の構成をつかめるようにしたい。

最後に Reasoning である。3 度目の読みの前に答えは必ず本文中にあることを伝え、設問 4、設問 5 に取り組む。答えの根拠になる部分に線を引かせると分かりやすい。答えを確認するときには、根拠の部分にも必ず触れ、やはり答えは必ず本文中にあるということを強調しておく。また、長文に慣れてくれば、以降の LESSON で設問に T&F 問題等を増やすと、長文読解の練習の幅が広がる。

USE Read 音読

音読においても、生徒の心理的負担を減らしつつ、且つ達成感を味わうため、音読する英文量を減らし、スムーズに英語らしく読むことを念頭に活動に取り組む。音読箇所を教科書 p.16 に限定し、最後に音読テストをすることを目標に指導する。指導時間に制限もあるため、各授業時間、最初の 10 分程度を音読の練習活動に充てる帯活動として取り入れると、教師の負担が少なくなると思われる。まず、新出単語の個々の発音を丁寧に確認する。特に練習を要する [r], [ʃ], [θ] の発音を意識させると、生徒は熱心に発音練習に取り組む。全体の音読練習に入る前に、1 語ずつ単語をリピートさせることも可能である。新出単語の練習は行っているが、本文の中には発音を忘れていた単語も存在する。個々の発音の確認、口形の確認を含め、1 語ずつリピートは必要な活動だと思われる。次に、英語のリズムを意識させる。具体的には、強く読む単語にアクセント記号を書き入れ、英語独特のリズムを視覚的に表す。また音声のつながり・省略等、生徒自身で練習に取り組むときに参考になるスラーなどの記号も適宜書き込む。その後、生徒の実態にあわせ、リピート、Buzz Reading など種々の練習を行う。必要に応じて、部分的にフレーズを取り出し、個人練習のときにもより英語らしい音声の再生ができるように慣れさせる。十分にリズムよく本文が音読できるようになれば、順次ペア活動も取り入れ、練習で生徒が

飽きない工夫をしながら、以降の授業の一部で音読練習を取り入れていく。ペア活動で生徒の読む回数を増やしつつ好評であったのが、ペアをローテーションで変える方法である（資料 5）。一定の時間が過ぎれば次のペアを作るように指示を出すと、限られた活動時間の中で、読む回数を増やすことができるとともに、毎回練習相手が変わるので、新鮮さや緊張感があり、効果的であったと考えられる。最後に、授業の進行状況を踏まえ、音読テストを行う。ALT に協力を求めるとさらに生徒の達成感が上がるだろう。

USE Mini-project

ここまでの授業で、自己表現に向けてのインプットがあるため、順に活動に取り組むことで、モデル文を参考に自分史エッセイに取り組むことができる。ただし、書きたい内容がない、分からないという生徒がいるため、2. Speak の活動を丁寧に行うことで、エッセイに書く内容のヒントを事前に思い浮かべることができる。2. Speak の活動の他に、日本語を使って意見を交流させると、作文に書く内容を具体的にしやすい。実際にエッセイを書くときには、3. Read にある英文をモデルにすること、一部を変化させることによって、一定量のエッセイになることを押さえ、少しでも量に対する抵抗を減らしておきたい（資料 6）。また、IDEA BOX の表現だけでは、性格に関する単語が少ないので、他にも提示する必要があると思われる。

We're Talking 2

ここでは、グループで skit を作り、演じることにチャレンジすることを目標とする。新出単語の導入、Talking Point の説明の後、口頭で exercise を行ったり、自分で文を作ったりして、Why~? Because. の使い方を運用できるようにする。また、相手の意見に賛成する表現だけでなく、反対する表現も伝え、skit 作りに役立てるよう準備を行う。実際にグループになり skit 作りに入る前には、本文では musician が話題の中心であるが、話題をグループ独自のものにすることによって次の台詞を作りやすいことを示し、本文から大幅に逸脱しないように留意したい。グループで活動を行うことで楽しさが増すことは

もちろん、自分たちで理由を尋ねたり、その理由を説明したりすることで、Why～? Because～.の表現の定着が効果的に図ることができる（資料7）。各グループの発表の後には、”What were they talking about?”など、skitの発表内容について問う質問を行い、その中にWhy～? Because～.の表現を取り入れると、それらの定着についても確認することができる。クラスメイトの発表をきちんと聞くという当たり前の姿勢を大切にすることもでき、今後の活動につなぐことのできる練習にもなるだろう。

3. 指導を通して

LESSON 2を通して、地球の歴史というテーマにいかに関心を持たせるかという問題が、私にとって1つの壁であった。実際、とびらを使った導入で、生徒はつまらなさそうな反応をしたのも事実である。そこで、一見興味のない話題でも、分かる達成感やできる感覚を得ることによって、今後の英語学習につなげることはできないだろうかという視点を変え、授業を展開したつもりである。

GETでは、主人公である健たちと同じような経験を生徒自身が持っていないかを考えさせ、自分の生活に関する話題を、学習した文法事項を使って表現できることを意識させた。なかなか清掃活動中に化石を発見するという場面に遭遇する生徒はいないが、中学生が化石を発見したというニュースなどを織り交ぜながら、「そういえば自分もこんなものを拾ったことがあるという」意見が出る場合もあり、少しは生徒の生活に近づけることができたように感じる。

Readに関しては、長文に取り組むことに十分に慣れているとは言えない段階のため、このLESSONだけでは長文は難しいという印象をぬぐい去ることはできない。しかし、継続して長文読解の3つのskillを磨き高めていくことにより、初めは読解に時間がかかり苦戦していた生徒が、長文読解のコツをつかむことにより、1分間60語を読むという最終目標に少しずつ近づき、解ける設問の量を増やすことができたように感じる。

また、個人活動だけでなく、適宜ペア活動・グループ活動を取り入れることで、英語学習における人

と交わる楽しさを少しは感じていたように思う。例えば、音読でのペア活動では、うまく読めない単語を教え合い、よりよく音読できるようアドバイスする姿があったり、We're Talking 2のskitの発表では、好きな先生の話題が取り上げられ、英語発表の後日本語ではあるがその話題でしばらく盛り上がりつつもした。興味を持ちにくいテーマを扱う中に、楽しさを見いだせたことは1つの成果だったと思う。

しかしながら、時間の配分に苦勞をした。特に音読テストはこのLESSON終了後、すぐに行うことはできず、しばらく帯活動として、各授業の10分程度をさいて、次のLESSONに入ってからもしばらく練習を続け、生徒が十分に音読できると判断できた後に行った。また、長文の問題やエッセイでは、授業中で終わらなかったところを宿題にし、次の授業で短時間の見直しを行い、続きの課題に取り組んだ部分もある。自分なりに指導の強弱をはっきりさせ、生徒がゆったりと課題に向き合い、考える時間を確保できるような工夫を、さらに考える必要がある。

【参考文献】

- ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会(2008)「中学校・高校英語 段階的スピーキング活動42」三省堂
- 川上正輝(2005)「高校入試問題を授業する 英語科編」明治図書
- 瀧沢広人(2009)「中学英語高校入試力に挑む 第2巻 “読解”入試力」